

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】本間美紀

【所属】(助成決定時) 早稲田大学

【研究題目】

15 世紀のペルシア・イスラーム絵画における中国花鳥画に関する研究

【研究の目的】(400 字程度)

本研究の目的は、15 世紀のペルシア・イスラーム絵画における中国美術からの影響をより詳細に解明するとともに、イスラーム地域から、中国、日本に至る広範囲なアジア地域において共有されていた、視覚文化の真相を明らかにすることである。従来の研究では、イスラーム地域と中国の比較が中心であったが、本研究では、考察対象として、日明関係資料を背景とした日本に現存する中国絵画も考察対象に入れることで、西アジア側に現存しない絵画資料を補い、中国を軸とした西アジア、東アジア双方への美術史のネットワークを重ねる視点を加えた。

ペルシア・イスラーム絵画における中国美術からの影響は、既に多くの先行研究が存在するが、ペルシア側に現存する絵画資料を取り上げ、単に「中国風」と結論づける論考が目立ち、中国側の基準作と画題や様式を比較する本格的な研究は存在していなかった。本研究では、現存数の多い花鳥画に焦点を当て、中国側の基準作を挙げて比較した上で、ペルシア側に現存する中国絵画、中国由来の絵画の画題や技法を詳細に検討し、当時のペルシアの書画院における中国絵画の収集状況や、それらを用いた絵の訓練の全貌を解明する端緒とした。

【研究の内容・方法】(800 字程度)

現存する中国絵画関連の資料は、『サライ・アルバム』(イスタンブール・トプカプ宮殿図書館所蔵)と『デイツ・アルバム』(ベルリン・ドイツ国立図書館)、これらのアルバムを離れて欧米の美術館に入った作品が用いられる。まずは、これらの資料から、中国花鳥画に由来する作品を画題(雁図、鴨図、鶴図他)ごとに抽出した上で、これまで一括りに「中国からの影響」と結論づけられてきたものも、ペルシア化の度合いに応じて大きく以下のように3段階に分類し、中国絵画との比較作業①②を行った。

(A) 中国絵画

(B) ペルシア画家が中国絵画を忠実に模写した作品

(C) ペルシア画家が中国絵画をペルシア様式で模写した作品

①中国絵画史における基準作の検討

先行研究では、ペルシア画家がどのような様式や時代の中国絵画を手本として、そのような絵を描いたのか、詳細な研究は存在しなかったため、本研究では、14~15 世紀のペルシア(イル・ハーン朝、ティムール朝)と直接交流のあった元~明時代の中国絵画に絞り、ペルシア側の作品と画中のポーズやモチーフ、画風等が一致する中国絵画を検討した。検索には、図録や、美術館・博物館等のコレクションデータベース等を用いた。

②ペルシア側に現存する作品の技法の検討

次に、①の作業を通じて選出した中国絵画と、ペルシア側の現存作品を、様式、構図、彩色などの細部の技法に至るまで比較検討した。特に、これまで「(A) 中国絵画」とされている幾つかの作品に対しては、「(B) ペルシア画家が中国絵画を忠実に模写した作品」である可能性も考え得るため、必要に応じて、高画質の画像データを新たに購入したり、新規撮影を依頼して細部のデータを入手し、詳細に比較を行った。(B)、(C)については、ペルシア画家が、どのような点を中国絵画から学び、一方で、どのようにペルシア様式化させているのか、特徴を考察した。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究では、画題ごとに(A)，(B)，(C)の3段階に分類して分析する手法を取ったことで、ペルシア化の進んだ(B)や(C)のみが現存する作品についても、手本となった中国絵画や、それらをペルシア画家が模写した例が、15世紀当時のペルシアの書画院には存在したという結論に至り、これまで認識されていた以上に、ペルシア画家が中国絵画に由来する作品を用いて、絵の訓練をしている状況が明らかとなった。当時のペルシアの書画院所蔵の作品例として、元～明時代の「芙蓉蘆雁図」「蓮池水禽図」「藻魚図」等が挙げられた。

また、ペルシア画家たちが、繰り返し中国絵画やそれらの模写を用いて、絵の訓練をするにつれて、(A)から(B)，(C)へと、変化に富む中国絵画の自然主義的な描写が薄れていき、伝統的なペルシア絵画に近い、平面的で文様のようにパターン化させていく特徴が見られた。